

NGLE 46. Construcciones causales, finales e
ilativas, Vol.2, pp.3449-3526

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43232

新文法 第2巻・第46章 原因・目的・連結構文
NGLE 46. Construcciones causales, finales e ilativas.
Vol.2, pp.3449-3526

太田 亨 (Akira OTA)

1. 本章の構成について

本章は原因と目的を表す構文と、前件と後件の意味関係から「原因・目的」と同様の意味を持つ連結構文の特徴について詳述している。

本章は 12 の節、6 の部分から構成される。① 第1～2節は原因・目的・連結構文の特徴と統語構造について、② 第3～6節が様々な原因構文の特徴と統語構造について、③ 第7～8節が目的構文に限定した特徴、④ 第9節が原因・目的構文における同一指示、⑤ 第10節が原因・目的の意味を持つ熟語表現、⑥ 第11～12節が連結構文の特徴、である。

2. ①「第1～2節」の要旨

【第1節 序論（原因・目的・連結構文の一般的特徴）】 pp.3449-3455

46.1. a, b. 原因¹⁾ (construcciones causales)・目的 (finales)・連結構文 (ilativas) は《原因-結果》関係を表すことでお互いに結びついている。原因と目的の統語的・意味的繋がりには連結との繋がりより強い。

46.1. c～i. 原因は 回顧的 (retrospectiva) で、目的は 前望的 (prospectiva) である。「まだ起こらない出来事の原因が発話時に存在する」ことを統語的文法マーカーで表現するのは稀である。原因と目的は近接した概念で、ある行為の目的や目標は同時に行為の意図の原因と解釈できる。また *por qué* で尋ねて *para que* で答えることも可能である。*por* は原因とともに手段・様式・方法を表し、*para* は行為の享受者、動きの目的地を導く。

46.1. j～l. 原因の概念は哲学で詳しく扱われてきたが、その違いは限られた数の言語表現でしか表せない。出来事の原因が直接的か間接的か決める言語範疇を解明することは難しく、意図的・非意図的行為の原因の違いを文法的に表すことはあまりない。

46.1. m～p. 被修飾述部の言い換えを導く原因節を 明確な原因 (causales definitorias)・分析的原因 (analíticas) と呼ぶ。その特徴は主節と従属節の内容の言い換えが許される点である。原因節は「原因」の概念を文法的に明示する形式の一つにすぎず、説明的関係節 (§44.11 以降) や等位節・並列節・前置詞・従属接続詞のほか、時制・法・従属化作用でも明示され、語彙的に動詞を通じて表せる。ほかにも、*cuando* による原因の言い換え、条件節による主節で認識される理由づけもあり、動詞の非人称形式（過去分詞・動名詞・*a*l+不定詞）も原因解釈を許す場合がある。

¹⁾ 下線を施した術語は、原文で総大文字による強調がなされていることを示す。以下全て同様。

46.1. q, r. 「目的性 (finalidad)」²⁾を表す形式が原因の場合より少ないのは、特定化された概念だからである。目的性は意図と結びつくため、許容する文法環境を大幅に制限し、空間や時制の隣接性を獲得することが少なく、等位も並列も許さない。*para* の目的節は常に接続法だが、*porque* が接続法になるのは特別な場合である。*un lugar donde dormir* は不定詞と関係詞が結びついて目的を表すことがあり、多くの語彙的表現で示される。

【第2節 原因・目的構文の統語構造】 pp.3455-3460

- 46.2. a~c. 厳密に形式的に見ると、原因と目的の一致点は多い。まず、*porque* 節と *para que* 節はともに前置詞句形式を持ち、*por* はその原因の意味から、名詞句 (*por su valor*) や形容詞句 (*por tonto*)、名詞従属節 (*porque ella lo pidió*) を許容する。*porque ella lo pidió* の下線部が代名詞 (*por eso*) や名詞句 (*por esa razón*) と交替することから、*[por] [que ella lo pidió]* という分節が文法的に裏づけられるが、*[porque] [ella lo pidió]* も正書法・音韻論理由で支持される。この2つの分節法は目的節にも当てはまり、*[para] [que estés más cómoda]* は《前置詞+名詞従属節》に相当し、前置詞句の特徴を持つ。一方、*[para que] [estés más cómoda]* も定動詞の副詞従属節《従属化接続詞+節》に相当する。
- 46.2. d~f. 原因と目的の形式的一致は前置詞が節でない項を導く用法にも及び、行為や出来事を示す名詞は従属節への言い換えを許す。言い換えは強調関係節を持つ名詞句や置き換え可能な名詞節にも広がる。また、*por* が導く補語には目的節への言い換えを許すものがある。名詞項の原因前置詞句は同種の従属節と等位し、名詞の中には少数だが名詞項の原因構文や目的構文に無冠詞で現れるものもある。
- 46.2. g~j. *porque* の綴り字統合は *para que* に比べて統語的な影響がある。*por* を伴う2つの名詞項に等位させることで、ある名詞従属節をそれに似た従属節と等位できる。目的構文の場合は前置詞句の等位だけでなく、原因節では普通認めない前置詞項の等位も許す。*porque era un cobarde* は二重の分節機能を持ち、節であり前置詞句でもある。
- 46.2. k, l. *porque* が先頭に来る従属節は、動詞が他のいかなる表現によらず接続法で表される場合に目的の意味を得る。従属節の時制で示された状態は、主節動詞で表された状態より時間が後になる。《*porque*+接続法》の目的の意味とそこから生じる動詞の前望的解釈は、接続法になる理由が他にある場合は目的の意味を獲得しない。また、《*porque*+接続法》は同一指示 (§46.9) の条件下で、《*porque*+不定詞》を許容する。
- 46.2. m~ñ. *por* が接続法の被制補語 (*complemento de régimen*) の頭に立つと、*por que* でも *porque* でもよいが、直説法の被制補語のときは、*por que* になる。一方が項 (*argumental*) 補語では、もう一方がそうでないため、両方の形式が許される。目的節の場合も似ているが、*para* と *que* は形態的にも正書法的にも合わせ書きしない。また、*que* が関係代名詞のとき *por que* は合わせ書きしない。*por si* と *para si* は接続詞と解釈されず、前者は偶然性に関連した原因を、後者は仮定的状況に関連した目的を表す。

²⁾ 「 」で括った術語は、原文において ‘ ’ で括られた語であることを示す。以下全て同様。

3. ②「第3～6節」の要旨

【第3節 動詞述部に対する内部的・外部的原因構文，主な相違点】 pp.3460-3464

- 46.3. a～g. 原因と目的の前置詞句は述部に 内部的 (internos) か 外部的 (externos) である。原因を特定する修飾部や主動詞が記述する行為や物事の状態の目的は内部的である。逆に，述部に外部的な修飾部は状態・行為・過程の原因を表さず，語られたことやこれから語る説明や釈明を導く。プロトタイプの原因節は動詞述部に内部的修飾部をもたらし，*porque* で導かれるのが普通だが，*de* で構成されることもある。また，疑問詞 *por qué* と相関するため，*porque* で答えるのがふさわしく，様々な統語的素材で焦点化される。焦点化は前置化を通じて得られるほか，*incluso, también* のような副詞は習慣の焦点化要素を成す。*sino* も同様に否定副詞や否定表現との関係で焦点化マーカーになる。疑問の叙法は焦点化を導くが，感嘆の叙法も同様であり，接続法が不可欠となる。
- 46.3. h～l. トピック を成す節が 述部に外部的な原因節 の第1タイプである。この機能は原因の *como* に特に認められるが，節に前置されるときに限定され，別のトピック化要素に続いて現れる。また，*puesto que* でトピックの位置にある場合も同様だが，*como* よりは少ない。言表型原因節 (§46.5a 以降) や説明節と呼ばれる原因節も述部に外部的である。これらはポーズを置くことで，主節で表明する特定の説明を加えたり前出ししたりする。言表型原因節は 説明的原因節 の特別な場合とする説や，述部への外部的原因節とする説もある。*pues* 節は説明的原因節の傍証となり，項となる素材 を構成して 暗黙の前提 や 暗黙の仮定 を省略した素材となる。説明的原因節は，スペイン語も他の言語も原因節の周辺のタイプでなく，多くの接続詞や接続表現を成す (§46.6h 以降)。

【第4節 原因節と目的節，項を取るものと取らないもの】 pp.3464-3472

- 46.4. a, b. 述部に内部的な補語は項補語の場合もそうでない場合もあり，原因構文にも目的構文にも当てはまる。また，修飾部は項を成すか，付加的 か 状況的 かのいずれかになる。項を成すものは被制補語を構成し，様々な範疇に対応した核により選択される。原因の前置詞の構成要素や，前置詞句が補う品詞，項的または状況的性質と言った基本的な統語範疇をクロスさせると，次のような分類表が得られる。

	A. 付加的（非項的）な原因前置詞句	B. 項的な原因前置詞句
1. 節的 構成 要素	a) 動詞や動詞句の補語	
	<i>Se fue a su casa porque le dolía mucho la cabeza.</i>	<i>Se desvivía por que su presencia y figura fueran admiradas de cuantos pudiesen verlas.</i>
	b) 名詞補語	
	<i>la supuesta dimisión del concejal porque quería perjudicar a su partido</i>	<i>Conocen ustedes bien nuestro interés por que el servicio mejore.</i>
	c) 形容詞補語	

	<i>Qué alivio – dice ella porque él le ha dicho Laurita,...</i>	<i>estudiantes muy preocupados por pasar el curso.</i>
2. 名詞的構成要素	a) 動詞や動詞句の補語	
	<i>Murió por una sobredosis de barbitúricos.</i>	<i>Destacan por su tamaño.</i>
	b) 名詞補語	
	<i>su explicable enfado por el comportamiento de su socio</i>	<i>el temor por la seguridad.</i>
	c) 形容詞補語	
	<i>famoso por sus desplantes a los periodistas.</i>	<i>estudiantes muy preocupados por su futuro.</i>

最も特徴的な原因従属節は各グループの1番目である。

46.4. c, d. *por*節の構成要素は人称形動詞の名詞従属節にも不定詞の名詞従属節にもなる。

名詞従属節でなく形容詞（句）による場合もあるが、従属節は *ser* の不定形が省かれた構文と解釈するのが普通であり、属詞が暗黙の不定詞の主語になる。主語は主動詞の間接補語に含まれ、直接補語や状況補語にも主語が被動作主や動作主に現れ、名詞や代名詞要素について述べることができる。*por*は特定の目的を目指した動詞の項補語を導き、目的に近い意味合いを持つ（*esforzarse, luchar, velar*等）。

46.4. e, f. *de*によって項補語と付加補語も導かれる。両者の境界は捉えがたく、情緒や感情反応を表す動詞、形容詞 *orgulloso, desesperar, feliz, contento* 等があるが、前者のほが多い。*de*は譲歩構文に近い意味の状況補語を導き、*No podía caminar {del frío que tenía ~ de tanto frío como tenía}* のような交替を起こす。

46.4. h. 目的の前置詞句は原因の前置詞句で導入したものと同一範疇を用いて分類でき、§46.4b で示したものと同様の統語的な句が得られる。

	A. 付加的（非項的）な原因前置詞句		B. 項的な原因前置詞句	
1. 節的構成要素	a)	<i>Leía un rato antes de dormir para que le viniera el sueño.</i>	a)	<i>El termostato sirve para que la temperatura no suba demasiado.</i>
	b)	<i>gruesas mantas de lana para soportar las duras noches de invierno</i>	b)	<i>Los manuales para aprender informática están en la segunda planta.</i>
	c)	<i>gruesas mantas de lana para soportar las duras noches de invierno de las once.</i>	c)	<i>No era la postura más adecuada para recibir noticias (Longares, Romanticismo).</i>
2. 名詞的構成要素	a)	<i>Se paralizarán estos días las obras en las carreteras para un más rápido regreso de los automovilistas.</i>	a)	<i>Se les preparaba para cualquier contingencia.</i>
	b)	<i>un nuevo parque para el disfrute de los ciudadanos</i>	b)	<i>Sus deseos de exhibirse en la vitrina azteca serán un acicate para un buen rendimiento del equipo.</i>

	c)	<i>servicios renovables trimestralmente para mayor comodidad del usuario.</i>	c)	<i>una cantidad suficiente para una casa nueva.</i>
--	----	---	----	---

46.4 i. *para* が導く目的解釈の項補語の意味概念には様々なものがある。概念間を分ける境界は常に厳密と言うわけではないが、次のようなものを指摘することができる。

意味概念	動 詞	名 詞	形 容 詞
使用または利益	<i>aprovechar, servir</i>	<i>beneficio, provecho, utilidad</i>	<i>aceptable, adecuado, aprovechable, (in) útil, provechoso</i>
適正, 能力または付与	<i>capacitar, habilitar, legitimar</i>	<i>capacidad, competencia, fuerza, habilidad, poder</i> 等	<i>apropiado, apto, capacitado, hábil, idóneo, inepto, torpe</i>
準備または素質	<i>acreditarse, mentalizarse, prepararse</i> 等	<i>acreditación, disposición, predestinación, preparación</i>	<i>dispuesto, listo, predestinado, preparado, presto, pronto</i>
十分であること	<i>bastar, faltar, sobrar</i>	<i>suficiencia</i>	<i>bastante, justo, suficiente</i>
必要性, 条件または便宜	<i>hacer falta</i>	<i>condición, ocasión, oportunidad, relevancia, requisito</i>	<i>importante, indispensable, necesario, oportuno</i>
手段, 道具および資力		<i>botón, dispositivo, medio, permiso, remedio</i> 等	
指示または指導		<i>directriz, medida, instrucción</i> 等	
推進または刺激		<i>acicate, estímulo, reto</i> 等	
障害	<i>obstar</i>	<i>amenaza, dificultad, obstáculo, peligro, problema, traba</i> 等	

46.4 j~ñ. 上の概念ですべてが出尽くしたのではなく、項補語と付加補語の境界は目的構文では他の文法領域より不安定である。また、表中の用法では *motivos (suficientes) para protestar* のように、特定の モダリティ形容詞 の 省略 を含んでいて、抽象的な形で名詞の外延的意味を含むものもある。

【第5節 原因節と目的節, 言表される場合と言表する場合】 pp.3472-3475

46.5. a, b. 本節で、原因・目的の従属節を 言表する 面に属し述部の外部に原因や目的があるもの（言表型）と、述部の内部にあって 言表される 面に属するもの（被言表型）を区別する。*Llueve porque esta zona está cerca de la montaña* と *Llueve, porque la gente lleva paraguas* を比べると、前者は原因節が *llover* の動作を理由づけ説明するが、後者は発話 *llueve* や結論に至った 判断 の暗黙の動詞が別にある。伝統文法でも、前者を 実際の原因 や 物質的原因、後者を 論理的原因 と呼んできた。

46.5. c~f. *porque* は言表型接続詞の中で最も頻度が高いが唯一のものではない。同種のも

のに, *dado que, puesto que, ya que* 等も挙げられる。*¿Hace frío afuera? Porque los veo a ustedes muy abrigados* は、誰かが寒がっているのではなく、質問する理由づけを導く。また、原因節が疑問節に先行する場合、質問部を提案と解釈できる。言表型節は理由づけ発話行為に応じた 1 人称の暗黙の言外動詞によると理解されるが、命令形の *dime* や *dígame* が省略されていると 2 人称になる。

- 46.5. g~i. これらの区別は目的節にも適用される。目的従属節は言及する行為の目的を説明し（被言表型従属節），言明そのものの理由づけを表明する（言表型従属節）。後者は聞き手に向けられる。言表型目的従属節はメタ言語的表現が用いられ、発話を手短に話し相手や聴衆を疲れさせないようにして、正確に表現する気持ちからである。

【第 6 節 説明的原因節】 pp.3475-3484

- 46.6. a, b. 言表型原因節は主節で肯定 | 否定したことを説明し理由づけるが、説明的原因節は肯定 | 否定した事実を主節で理由づける。両者を分ける見方がある一方、前者を後者の変種とする考えもある。後者は、説明的従属節で提示された説明が疑問や命令部分を構成する事実に影響を与えて命題内容を修飾するのでないとする。説明的原因節はこれらの解釈どちらも成立する。
- 46.6. c, d. 説明的原因節は、節を構成する前後で述部によって表される状態だけでなく、主節で述べられる物事の状態にも影響を与え、従属節がある術語や名称の定義づけに使われる際に メタ言語的 になる。説明的原因節は統語的位置と情報的性質の機能に応じ 2 つのグループ（前置型 と 後置型）に分けられる。前者は原因従属節をテーマ的情報、既知または少なくとも発話背景として暗に想定された情報として提示し、後者は説明や理由づけは示されず、逆に予め知っているものとする。
- 46.6. e~k. 述部動詞に外部的な原因節は、節の焦点化 (§46.3c~g) に関する手続きを許さない。ゆえに、説明的原因節は問いかけへの応答に向かず、*¿Por qué?* で尋ねられたら *como* や *puesto que* でなく *porque* で答え、強調構文 も許さない。同様に、否定の及ぶ範囲外のため、対比の焦点化構文も許さず、焦点化副詞 (*también, solo* 等) も退ける。後置型の節は等位を退けるが、接続詞句での等位を拒まず、*...pues hace frío y prefiere no salir de casa* と言える。しかし、前置型の節には等位を許容するものもあり、*...como...y como...* のように、常に文頭のトピック位置に置かれる。前置型には《*comoquiera que* + 直説法》があり、様態の関係副詞従属節に近い。《接続詞 *que* + 直説法》は後置型で、命令文に続いて使われるのが普通である。説明的原因節は、*No quiero que me contraigas, que no está el horno para bolos* のように、後置型《*que* + 直説法》を成す。また、主節に 間接的動詞行為 を与えるモーダルな情報 (*No conviene llegar tarde, que después no hay sitio*) が含まれる時、後置型接続詞 *que* が使われる。
- 46.6. l, m. 古語の接続詞 *ca* は中世に後置型説明的原因従属節で用いられた。黄金世紀もそれ以降も見られるが文語的用法である。Cervantes の *Don Quijote* では見られるが、

Lope de Vega, Tirso de Molina, Calderón de la Barca では使われない。この用法は 16 世紀を通じ急速に衰退し、17 世紀に一層その傾向が進んだ。

- 46.6. n~q. 他の説明的原因従属節の接続詞は前置型か後置型どちらかだが、どちらも使えるものもある。例えば、*toda vez que* は後置型が多いが前置型もある。同様に *pues* は後置型の特徴を持つが、古典期の文語では *y* の後に置かれる前置型である。*dado / puesto / supuesto / visto que* は分詞起源で両型とも使われる。これらの意味は絶対文に由来し、*dado / visto que* は *dado* と *visto* を引き離すと名詞句にかわる。他方、*dado / visto / puesto que* は各々 3 音節で、始めの 2 つは第 1 強勢音節 (*da-*, *vis-*) が上昇調だが、*pues* はそうならない。一方、*poner* は文補語を成す場合 (*poner que es de día*) と、分詞の場合 (*puesto que es de día*) で意味の違いを引き起こす。これらは前置型も後置型もあるが、中南米も欧州も *puesto que* は少ない。前置型は説明的でなくトピック化原因節に近づいたものもあり、慣用句 *habida cuenta* も前置と後置どちらの例もある。また多くの例で、前置型と後置型の説明的原因節は節の情報分割に根本的な影響を与える。前置型は情報的にテーマに属するが、必ずしも聞き手や読み手に既知なのではない。多くの場合、節構造が 修辭的に 本当のテーマ情報であるかのように推論を評価し、情報をディスコース的に処理する形で語用論的タイプの帰結部になる。一方、*pues* は説明的原因節の頭で節との近接性が顕著で連結節をも構成する。加えて、接続詞の他に副詞的用法も持つ。

- 46.6. r~v. 説明的原因節の構成に関与する接続詞表現には明確に違いが感じられるものがある。例えば、原因の *cuanto más* は既に表明されたものに加えてある原因を表し、新しいほうは前のものより推論の重みづけを持つ。これは古典スペイン語で普通だったが、現在は欧州より中南米で頻度が高い。*cuanto más* は *especialmente porque* や *más aún porque*, *tanto más cuanto que* の言い換えを許すもので、付加-原因節 と呼ばれて、既に提供されたものを補う情報を加えるだけでなく情報の理由づけももたらす。原因の接続詞表現 *como que* は、一般に感嘆文の中で異質の評価を明らかなものとして表すか、独自のコメントを明白なものとして強調する。この表現は言及する情報とは異なる ディスコース順番 (turno discursivo) を作る。例えば、*¡Qué bueno es este poema!* と誰かが言えば、相手は *¡Como que es de Neruda!* と答える。また、他の人々の直近の認識内容を一部否定する節でも使われる。それは、話者がある判断をその文脈に導入するのをやめないとき、相手が発言の誤りに気づくというもので、例えば、*¡Qué rico me sabe este salchichón!* と言うと、それに反発する発言で、*¡Como que no es salchichón!* となる。

4. ③「第 7～8 節」の要旨

【第 7 節 目的節に特有の特徴】 pp.3484-3489

- 46.7. a~e. 伝統的に目的節を間接補語と解釈してきたが、*para* で導かれる補語が名詞句・節どちらの場合もこの分析を受入れられないのは、典型的な目的従属節を明確に特徴づける性質が行為を表す述部を修飾するからである。行為は意図的なものだが、必ず

しも物理的である必要はない。一般にこの構文は、意志のない行為や経験過程を表す述部で使うことはできない。人を表さないか動物の行為者ではこの構文は用いられないが、擬人化された用法は許容され、意志過程に近い行為が省略される場合も可能である。

46.7. f~h. 述部に対する内部的・外部的原因節の区別 (§46.3) は目的節にも適用される。内部的目的節は強調構文のものも含め、記述された焦点化過程に依拠する。焦点の副詞は動詞の他の補語に対するものと同様、述部に内部的な従属節にも影響を与える。その機能は距離を置いても、続いていても働く。外部的目的節と内部的目的節は、その両者の違いにもかかわらず、同一文列中に2つの目的補語を各々のタイプを同時に持つ構文ができ、両者が矛盾することも余剰的になることもない。

46.7. i~k. 《no+接続法》の統語条件は、接続詞 *que* が直説法で構成される場合 (§46.6i), 命令法で説明的原因節になるのと似ており、命令法で目的の意味を獲得する。この構文のいくつかは否定命令に近く、文脈の前提なしで《no vaya a+不定詞》のような動詞の言い換えを許す。また《no+接続法》の中には、《para que+接続法》言い換えを許すものがある。これは否定と同時に単に目的を表すのでなく、多くの場合、《por si+直説法》と修正される。また、《no+接続法》は過去形も許容するが、その場合《no fuera a+不定詞》が得られ、言表する面 (§46.5g) に相当する目的節と似たものになる。

46.7. l~ñ. 明白な目的節の場合、比較や対照の意味が隠れるものがある。この場合、*mejor* が比較の意味を強調するために現れる。また、目的節は結果節との結びつきが強い (§46.4l)。 *para* が先頭に立ち、目的でなく譲歩の意味を表すものがある。数は少なくなるが、時間的な連続を表すものもある。この場合、*para* だけが時の連続を表すのでなく、*más tarde* や *luego* のような表現も現れる。これらは新聞の言葉として多く、スペイン語全般のフォーマルな言い方として見られ、およそコピュラ節による言い換えができる。だが、特に主節動詞が意識・意志的行為を示す場合、目的の意味は全く消え去る。

【第8節 前置詞 *a* を伴う目的節】 pp.3489-3494

46.8. a~c. 本節では前置詞 *a* で導かれる目的の意味の前置詞句を分析し、句が被制補語、つまり項分節を構成することを示す。動きを表す動詞を修飾して、*ir a la ciudad a comprar* と不定詞従属節を伴うもの、*entrar en la oficina a que le firman a uno un papel* と動詞の人称形を伴うもの等である。だが、時には *Tuve que acompañarlo a que cumpliera lo prometido* と、運動が間接的に表現されるものもある。また、*a* が先頭に立つ目的の意味の補語は、いつも *para* で置き換えられるわけではない。*a* による構文は直接補語が省かれた他動詞も許容する。この構文は定形動詞（必ず接続法）の場合も不定詞の場合もあるが、意味はいつも同じわけではない。

46.8. d~g. 制止や介入、動きや活動の停止を表す動詞の多くで、目的の意味の《*a*+不定詞》を許容する。*a* を持つ目的補語は様々な文法特徴を有し、目的節や行き先を表す場所の補語とも共起可能であるが、運動の方向性を典型的に表すわけではなく、表面上あ

る行為の目標を表すのでもない。では、なぜ余剰的に感じるか。それは、動きが目指す目的はより一般的な性格を持つ出来事を同時に有するからである。§46.8d の構文を除けば、前置詞 *a* による目的構文における運動動詞の存在は不可欠であり、項的な性質を持つ。しかし、動きはある目標の方向へ向かう中で起こる。したがって、*Corrió al hospital a que le curaran la herida* は、*a* による目的補語が特定の方向へ向かって走る行為の目標を表し、第2目的補語 *para poder regresar pronto al trabajo* を加えることもできる。

- 46.8. h~j. *a* による補語は *para* が先に立つ目的の状況補語よりも主節述部に近い。実際、これらの補語が動詞に後置される場合、前者のほうが必然的に後者より先に置かれる。また、*a* による補語は否定を許容せず、従属節で主節動詞の主語の言及する人物が加わるような行為を暗示しない場合は意味がおかしくなる (*Vengo [para ~ *a] que tú puedas descansar*)。さらに、主節動詞と従属節動詞が異なる時制空間に位置できない。
- 46.8. k~m. 語彙的アスペクト (§23.3) や 行為のムード (§23.4) は、*a* で導かれる目的補語に (*para* で構成されるものに比べ) 制限をもたらす。後者は状態を表す述部を受けつけるが、前者はそれを退ける。それは *a* の目的補語の項的な性格を支持する大きな証拠であり、補語に含まれる名詞句から関係節や疑問節の構成が可能となる。
- 46.8. n~o. 援助、貢献、強要等、誰かが他の人へ 影響 を表す動詞は、*a* に導かれた目的の意味の節補語を選択する。*animar, ayudar, contribuir, obligar* 等がそうで、*ayudar(a alguien) a hacer(algo)* と補語2つで構成される。これらはある行為を与える目的地、話されている援助や強要や貢献が向かう目的を表す。*a* の目的の意味の項補語を受けつける最後のグループのうち、*esperar* は他動詞と被制動詞の場合で意味に違いがある。他動詞構文は *esperar algo* で「何かを欲する」だが、*a* の被制補語が存在すると *esperar a algo* で「何かが起こるまで行動を始めない」と解釈される。また、両者の違いは形態上にも反映し、前者から派生される名詞は *esperanza* で、後者は *espera* である。

5. ④【第9節 目的・原因構文における同一指示】(pp.3494-3504) の要旨

- 46.9. a, b. 不定詞は時制・人称・ボイスが表示されず、主節で情報が得られる。原因・目的節も同様である。しかし目的節は多くの場合、主節の主語と従属節の主語が一致する。伝統的には 一致した目的節 と呼ばれ、主動詞と従属の不定詞の間に 主語の同一指示 が見られる。同一指示 は、他の統語機能や接続法で表された従属節の主語にも及ぶが、従属節が接続法の場合、同一指示制約は下がる。一致した目的節の特徴は次の通りである。

		a) 不定詞節	b) 定動詞・人称形動詞節	
1 《主語・主語》	例	<i>Elena lo llamó para disculparse.</i>	例	<i>El plomero fue contratado para que arreglara la calefacción de todo el edificio.</i>
	解説	主動詞主語 <i>Elena</i> は不定詞 <i>disculparse</i> の暗黙の主語と同一指示	解説	主動詞主語 <i>el plomero</i> は従属動詞 <i>arreglara</i> の暗黙の主語と同一指示

2 《直接補語・主語》	例	<i>La llamaron para impartir un curso de maestría.</i>	例	<i>La llamaron para que impartiera un curso de maestría.</i>
	解説	主動詞の直接補語 <i>la</i> は不定詞 <i>impartir</i> の暗黙の主語と同一指示になる	解説	主動詞の直接補語 <i>la</i> は従属動詞 <i>impartiera</i> の暗黙の主語と同一指示
3 《間接補語・主語》	例	<i>Le hicieron una sustanciosa oferta para cambiar de empresa.</i>	例	<i>Dales unas monedas para que se compren un helado.</i>
	解説	主動詞の間接補語 (<i>le</i>) は不定詞 (<i>cambiar</i>) の暗黙の主語と同一指示	解説	主動詞の間接補語 (<i>les</i>) は従属動詞 (<i>compren</i>) の暗黙の主語と同一指示

これらに、被制補語の前置詞項がある不定詞の暗黙の主語の先行詞構文 (*También confía en Faryd para cuidar los tres palos*) と、暗黙の主語の先行詞が主節述部の付加補語の例 (*Viaja con su hija para que se distraiga*) を加えることができる。不定詞の暗黙の主語の指示対象は 直接 または 連続 した統語環境から得られるが、人称形動詞の場合は人称代名詞に同化し、文脈の他の要素から復元できる。例えば、*Javier pensó en realizar ese viaje para que se distrajera* では、*distrajera* の主語の先行詞は *Javier* でない可能性が大きく、それは接続法人称の理由による。

46.9. c~h. 1a の文で主語に非特有の性質は同一指示の関係を変えない。接続法節と不定詞節は多くの場合、相補分布 の関係であり、主動詞と従属動詞の主語の同一指示が逆に解釈するのが普通である。例えば、*Viaja para distraerse* は主語が同一人物だが、*Viaja para que se distraiga* は主語が異なる。この接続法は 非接触型の指示影響 か 同一指示の欠落 (統語論で「同一指示回避」) を強いる。次に 1b では、*fue contratado* の主語と *arreglara* の主語の間に同一指示が得られる。受動態が同一指示を促すのは、呼応する能動文が非接触型の指示影響を形作る特徴の要因となっている。同様の構造は命令文の場合にも当てはまり、接続法は非接触型の指示影響を与えない。また、*poder*, *ser capaz* 等の述部が従属節にあることで、1b の統語構造の拡張を許す。

46.9. i~m. 従属節での接続法と不定詞の交替は多く見られる。2a と 2b のペアも交替が認められるのは、*llamaron* の直接補語が不定詞の暗黙の主語の先行詞だからである。2a の不定詞による目的構文 (*Por fin las contrataron para bailar tangos en Medellín*) で、従属節の暗黙の主語の先行詞要素は下線部である。これは、...*para que bailasen* ... と言い換えられる。また、3a と 3b も類似した交替が見られ、同一指示は接続法の節よりも不定詞のほうでより厳しくなる。接続法では非同一指示の主語解釈を許すが、不定詞では退けられる。接続法と不定詞の違いはグループ 3 で制約があり、従属節の不定詞による同一指示の関係が上で述べたような形ほど厳密でない。*Nos dio dinero para salir del país* は、誰かにお金をもらって我々が国を出て行く解釈 (3a)、我々にお金を与える人

物がそのお金で出国証を買う解釈（1a）がある。接続法動詞の人称指示は、直説法と比べ制限されるため、文法的には人称指示も同一指示の欠落も強要しない。

- 46.9. n～s. 原因従属節には接続法が従属節を項として選択する述部により導かれるものがある。付加補語の場合はこの述部とは異なる述部によって導かれる。前者は目的節の場合と似ているが、定動詞に一致した従属節では退けられる。一方、後者では自然に許容できる。この違いは前者における目的節の前望的な特徴と関係しており、また意図・意志的な意味とも関係がある。

Le escribieron urgentemente para resolver el problema と *Lo contrataron para resolver el problema* を比べると、前者は書いた人が問題を解決すると取れ（1a）、後者は契約された人が問題を解決する解釈（2a）と、契約する人たち自身が問題を解決する解釈（1a）がある。先行詞の 不確定さ は目的構文だけの特徴的ではなく、一部はディスコース上の要素により決定される。これは目的従属節が状態や特性でなく行為を示すのと同様であり、3b に相当する対立を生む（*Le daba dinero para [que fuera ~ ir] al cine; ... [que fuera ~ *ser] una persona responsable*）。

目的の意味の不定詞が、主動詞のいかなる項とも同一指示でないような独自の主語を持つことはあまり起こらない。しかし、従属節の主語が主動詞の主語、特に不定詞の主語が主動詞の後に現れるとまれに許容される。また、不定詞の主語が対比されていなくても焦点化されている場合、主語の同一指示があってもなくても許容される。

他動詞の不定詞が直接補語を欠くのは、弱形代名詞が動詞の直接補語だからという説明には、2つの統語的な分析が提唱されている。まず *Llevé la lupa para arreglar* で、*arreglar* の直接補語が暗に了解され、先行詞は *la lupa* である。次に、不定詞が能動態形式を持ち、受動態の解釈を受ける（*un poema difícil de traducir*）。前者は不定詞の節において暗黙の補語と弱形代名詞が交替するのにもうまく働く。また、補語のない不定詞と補語のある定動詞が交替するのにも有利である。一方、後者は受動態の主語が能動態動詞の直接目的語に対応すると目的語の同一指示を主語の同一指示に変換させる。

同一指示の関係は、時には主動詞の 行為者補語 が不定詞の暗黙の主語の先行詞を提供することも観察され、またこの行為者補語は現れないこともある（*El auto fue vendido (por alguien) para pagar la hipoteca de la casa*）。この場合、車を売った人と支払いを実行する人が別の人物であることも可能で、同じ図式は再帰受身でも見られる。多くの非一致の目的節では不特定主語と解釈されるが、主節からある不定詞の暗黙の主語の指示対象を得ることが可能な場合があり、特に暗に了解された間接補語が予想できる場合に起こる。類似の現象はジャンル解釈の暗黙の主語の場合でも起こる。

他動詞の不定詞は、その直接補語の先行詞が関係代名詞や疑問詞のとき、直接補語が省略可能なことがある。*la novela que abandoné finalmente sin terminar de leer* は、*leerla* にはならない。代名詞抜き言い方は口語の特徴だが不正確なわけではない。逆に、関係詞や疑問詞がない不定詞の直接補語の省略は不可能である。この理由より、関

係詞代名詞は省略される直接補語の先行詞を構成すると理解されるのが普通である。

46.9. t~z. 原因節の同一指示の関係では, §46.9a と似た分類が得られる。

	a) 不定詞節	b) 定動詞・人称形動詞節
1. 《主語－主語》	<i>Resbalé y me caí por ir leyendo mientras paseaba.</i>	<i>Resbalé y me caí porque iba leyendo mientras paseaba.</i>
2. 《直接補語－主語》	<i>La contrataron por ser la primera especialista en su campo.</i>	<i>La contrataron porque era la primera especialista en su campo.</i>
3. 《間接補語－主語》	<i>Eso te pasa por no tener cuidado.</i>	<i>Eso te pasa porque no tienes cuidado.</i>

項補語も付加補語も不定詞の暗黙の主語の先行詞を含むことができるが (§46.9a), 不定詞の暗黙の主語の先行詞は su castigo por escaparse のような非節的分節にもなる。

これまで主語の同一指示は, 従属節が直説法動詞のときよりオープンであったが, 同一指示を引き起こす要因はほぼディスコース型に限られる。1b の *iba* は 1 人称であり 3 人称ではないと理解される。ディスコース上にテーマ情報を変更する理由がないからである。しかし, 見ていた人と倒れた人が異なる人物となる解釈を強制する先行文脈を考えることは可能で, それは他の 2 つの b にも適用できる。1a は *Luchan por sobrevivir* のように, 原因解釈の項補語にも拡張される。目的節に最も近い原因節 (§46.1f 以降) も, *Contó un chiste [por ~ para] romper el hielo* のようにこの解釈を容易に許容する。

不定詞の暗黙の主語の先行詞に関する解釈は 2a と 3a にも言える。しかし, 目的節について述べた規則 (§46.9r) を原因節には拡張できないため, 主節の行為者補語が不定詞の暗黙の主語の先行詞を与えることになる。原因節と目的節の違いは, 目的補語と様態の副詞 (特に受身文で) の間に与えられる関係に拠ることが多い。

不定詞の主語は原因節において無先行詞になることがあり, 非一致型原因節 の場合, 先行するディスコース上に提示された何らかの要素の情報を復元する必要がある。不定詞の暗黙の主語の先行詞が主節述部の暗黙の補語と考えられることもあり, このタイプの素材は非一致型原因節を一致型へと減らすとする考えもある。目的の不定詞は主節動詞による発話に関し前望的に解釈される。これは, それらの節で表される行為とプロセスの意図的な性質に直接関係するものである。目的節は回顧的解釈を許さないが (§46.1f), 原因の不定詞は主動詞と同時か後を表すことができる。原因節のグループ 2 の例で, 不定詞の単純形と複合形が自由に入れ替わる。この交替は「原因」という概念の回顧的性質にある程度よるが, 不定詞が状態より行為を示すからである。場合によって, 原因の不定詞の時制解釈が語彙的要素にも文法的要素にも導かれず, 世界に対する知識を含む, 文脈にある情報のみから得られることがある。 *El fiscal exige a un médico 15 millones por dejar cojo a un niño* は言語外知識のみ, より正確には人間の理性的な習慣により, 不定詞が示す行為が主動詞の表す時制よりも前とする結論に達する。一般に, スペイン語における単純形不定詞は, 複合形と交替が可能な場合, より高い頻度で使われる。

一致型不定詞の原因節は定動詞節と交換されるのが普通だったが、そこに含まれる情報の真実性が明確な形で表されないときに両者は異なる。*Fue despedido por insultar a su jefe* には... *cosa que hizo jamás* が続くが、*Fue despedido porque insultó a su jefe* に続くと矛盾する。この違いは、不定詞の時制的な解釈が文法的・語彙的要因に同時に関与することと関係する。不定詞の単純形と複合形の交替は要因の1つとなり得るが、不定詞の原因従属節の形式と解釈の変数の重みづけはまだ体系的に研究されていない。

6. ⑤【第10節 目的と原因の意味の熟語表現】(pp.3504-3513)の要旨

46.10. a~d. 原因と目的の接続詞熟語は様々な統語素材で構成されるが、2つの形式に解釈される。まず《前置詞+名詞+de》で、*a causa de*, *con motivo de*, *en razón de*, *por causa de*, *por motivo de*, *por razón de*等の前置詞熟語に *que*を加え、*a causa de que*, *con motivo de que*等の接続詞熟語が得られる。しかし、第2の分析法では、*que*は前置詞表現の機能の名詞従属節と解釈される。前者は前置詞表現が名詞句だが、後者は名詞従属節となる。後者の解釈は不定詞を伴った表現をうまく説明できる利点がある。

*en virtud de*等の前置詞熟語は、①名詞句、②不定詞節、③人称形動詞節の3表現を許す。違いは分節に影響し、*[en virtud de][que el Tíbet se encontraba ya libre]*, *[en virtud de que][el Tíbet se encontraba ya libre]*のようになる。この分節は *porque* と *para que* の違いを思い起こさせるが (§46.2a 以降)、第1分析のほうが利点は多く、特に *porque* の綴り字統合が適用できる。だが、すべての前置詞熟語表現にまで交替現象が拡大するのではない。例えば *en vista de* は、不定詞で使うのは名詞句や人称形動詞と使うよりずっと少ない。同様に、《*por causa de*+名詞句》は一般用法だが、《*por causa de*+名詞従属節》はより制限が厳しく、欧州でも中南米でも後者のほうが頻度は高い。

46.10. e~i. *por motivo de* はスペインで19世紀から20世紀前半まで広く記録されている。現在でもラ・プラタ川流域、カリブ地方、中米の一部の国々では使い続けられている。*por miedo a* と *por miedo de* は *miedo* が修飾語を受容し、他の語(*temor* や *respeto* 等)と交換できるため熟語と見なせない。《名詞+名詞句》で形成されるのが、原因の意味の熟語表現 *gracias a* と *merced a* である。*gracias* の意味は、主節で示された状態がポジティブか有利であることを求めるが、*gracias a* はポジティブでない文脈にも広がっており、名詞の脱意味化が進行していることを示している。同じことは、*en virtud de* にも言える。*por culpa de* はこれらの熟語と異なり、反対の意味の状態を含意する。だが、皮肉の効果を起こしたいとき、これらの意味的要件が変わることはある。

《過去分詞+*que*》により、接続詞熟語 *dado que*, *habida cuenta (de) que*, *puesto que*, *supuesto que*, *visto que* が得られる (§46.6ñ)。前置詞熟語 *debido a* も部分的にこれらの表現と似ており、不定詞が続く用法が散見されるが、使用は勧められない。

46.10. j~m. これまでの原因の熟語は前置詞熟語で名詞要素や節の要素を許容するが、ここでは接続詞表現のみで、《副詞+*que*》で原因の熟語 *ya que* が構成される (§46.6)。

そして、副詞 *cuanto* により *por cuanto* と *en tanto en cuanto* が構成され、《前置詞＋*que*》により *porque* が得られる。チリ、アルゼンチン、ウルグアイほかの国々では、時に原因の接続詞的熟語 *desde que* が使われる。口語に限定される場合も、より上の階層の場合もある。この接続詞熟語は、スペイン語全般の用法で時の意味合いの *desde que* とは異なる。*desde el momento en que* はスペイン語一般に共通し、前置詞句の構造を示す。この組み合わせは、*que* を関係代名詞と解釈すれば非語彙的用法を許すが、物事の状態の開始時点でなく、正当化する理由を指す場合は原因句となる。その場合、*en tanto en cuanto* か *en tanto que* に相当する。*desde el momento(en) que* が時間的に解釈されると、厳密な意味の前置詞句を構成することになる。この用法は形容詞 (*desde el preciso momento en que*) と焦点化副詞 (*solo desde el momento en que*) を許容する。

- 46.10. n～w. これまで分析してきた原因の熟語と似た構造で目的の意味のものも得られ、《前置詞＋名詞＋前置詞》で多くの目的の熟語が作られる。これらの組み合わせは、*con ánimo de, con intención de, con miras a, con vistas a, en orden a, a fin de, a efecto de* など意図、目的、目標を表す名詞で構成される。これらは名詞的要素の前置詞熟語としては顕著な違いを見せる。*con miras a, con vistas a, en orden a* 等は名詞要素において制約を示す程度だが、その他のものは限定性が強く、*con ánimo de* は *lucro, revancha, robo, triunfo, victoria* 等の限定辞なしの名詞と一緒にしか使われない。これらは節の要素と構成される文章中で多く用いられ、不定詞や動詞人称形との組み合わせが可能であることから、これまで *que* を伴う接続詞熟語として分類されてきた。事実、*a fin de* と *con intención de* は、名詞要素とともに書き言葉で用いられることはまれだった。一方、人称形動詞の従属節での用法は一般的である。伝統的にはこの分析を不定詞用法に拡張してきたが、現在は非常に問題が多いと考えられる。その理由の一つとして、不定詞補語が時に前置詞要素において予期される特徴を見せることが挙げられる。

a objeto de, a virtud de, con vista a, en vistas a は標準語には取り込まれてこなかったが、目的の意味の *con miras a, con vistas a* と原因の意味の *a resultas de* は許容されてきた。これらの熟語は前置詞的なものと考えられ、3タイプの表現を許すと予期される。名詞句、不定詞、人称形動詞である。*a efectos de* と *en orden a* は新聞、政治、行政の文章に多く現れるが、ほかの種類のテキストにも時に記される。これらの表現に加え、*el objeto de* と *al objeto de* が挙げられる。前置詞熟語 *en aras de* は「～に有利に、～に～のために」を意味し、名詞表現と節表現の用法がある。前者のほうが好まれ、名詞 *ara* の意味に合わせ、その恩恵によって何かがなされる名詞要素が予期される。また、《*de cara a*＋名詞句》は、まれに文章中に記される節要素を伴ったものに好まれる。前置詞 *con* と名詞 *deseo, fin, idea, propósito* や冠詞を伴った類似の名詞からなる前置詞句は完全には熟語化していない。なぜなら、それらは小辞のパラダイムに統合されていないからである。これらの名詞は冠詞 (*con el deseo de que*) と形容詞 (*con el evidente fin de*)、指示詞 (*con ese inconfesable deseo*) を許容する。熟語 *de (tal) forma que* と *de (tal)*

manera que と *de (tal) modo que* は結果の意味が多いが、接続法で用いられるとその意味を失わずに目的の意味を獲得する。中南米では、*de manera de* と *de modo de* が不定詞を伴い目的の意味で用いられる。これらの不定詞は名詞句と交替することはないのだが、前置詞に近づいていないからと考えられる。また、これらの表現の *de* を *a* に換えることはできない。熟語 *con tal de (que)* はいつも接続法か不定詞とともに使われる。また、*con tal que* も正用である。この表現は主節で提示された行為やプロセスの結果を導く特徴がある。この構文では、*cualquier(a)*, *nada*, *todo* 等全体を表す量化子を伴うことが多い。しかし、この熟語は、主節で提示される状態が話されている結果を得るのに必要なとき、別の文脈も許すことがある。この規則を変更する節においては、主節で述べられる状態がいかなるものであっても、それにより従属節で述べられる目的が達成されるなら、許容できることが分かる。主節で表される状況がなぜそこまで極端か理由は分からないが、求められる目的によって補われると理解される。

7. ⑥「第11～12節」の要旨

【第11節 連結構文 (I) : 他の統語規則との関係】 pp.3513-3519

- 46.11. a～c. 第45章で結果構文を一定の数、量、度合いがある領域や高い水準に達することで生じた結果が表されると特徴づけた。この構文は名詞句や形容詞句の範囲を超えない可能性がある。だが、同じ様に記述された状態の結果を述べても、異なる統語的な複合文中で、話者が前もって表明したものの自然な派生物として示すような構文は文法的性質が大いに異なる。これは 連結構文 と呼ばれ、接続詞 *así que*, *conque*, *de modo que*, *luego* 等から成る。*luego* や *conque* は 連結接続詞, *así que* と *de modo que* は連結接続詞熟語と呼ばれる。伝統的にこれらの構文、および *tan(to)* と *tal* で導入される構文に「結果」という用語が充てられてきたが、これらを分ける理由が数多く存在する。*tan(to)* と *tal* が先に立つ名詞句、形容詞句、副詞句は比較構文と共通の特徴を持つ。反対に連結節は原因節や等位節と接点を持つ。*ilativo* という形容詞は *ilación* と関係があり、アカデミア辞書は「ディスコース部分の論理的・順序的な接合」と定義し、ラテン語の *illatīvus* は動詞 *infere* の受動分詞 *illatus* に由来する。連結節はメッセージを関連づけて分節し、《原因-結果》関係の成立を許すような論証材料を形成する。連結節は動詞の人称形から成るが、連結解釈の現在分詞節もあり、数多くのニュアンスを得る。
- 46.11. d～f. 連結節は説明的原因節 (§46.6) と大いに関係がある。説明的原因節は2つの複合文の可視要素だけでなく、暗示的前提 (*premisa implícita*) と呼ぶべき第3の要素が暗示される。連結節を特徴づける論証関係も大変似ており、*Pienso, luego existo* は、もし「誰かが考えればその人は在る」という暗示的前提に支えられた論理的帰結を成す。説明的原因節同様、これらの前提は連結節において暗黙のものである。更にこれらの節での推論は暗示的な推測の真実性や自然さで妥当になる。説明的原因節と連結節の密接な関係は他の効果も持つ。構成されるディスコース的な見方を変えれば、一方からもう

一方の機能への言い換えを相互に許すが、両者には顕著な違いが存在する。まず、説明的原因節は主節に前置され得るが (§46.6d)、連結節は必ず後置される。また、連結節は明示的推論 (*deducción expresa*) が成り立つが、説明的原因節はより関連する情報として前に示す形で理由づけを加えるのが普通である。また、連結節は疑問文、命令文、感嘆文等、動詞行為を構成する文の後には許容しないが、説明的原因節は受けつける (§46.6b 以降)。一般に連結節から抽出される前提は宣言文で、**Sal de mi casa, de modo que vete recogiendo tus cosas* のように十全な意味を付与することはできないが、連結接続詞に続く節は、*No me ha llegado la convocatoria, así que ¿a qué hora es la reunión?* のように、動詞行為を問題なく構成する。説明的原因節の先頭に立つ接続詞は修辭疑問節を導けるが (... *ya que ¿para qué vamos a esperar?*)、命令節 (*... *ya que vámonos*)、感嘆節等動詞行為節を導かない。したがって、この点で連結節と説明的原因節の差は顕著である。

- 46.11. g~j. 連結節を等位節と一緒にすべきとする説がある。連結節が1つの節のみでなく、繋ぎ合わされた推論を形成する1つの完全な連結文を導くからである。*pues* は原因の従属節ではなく、主節と別の従属節で構成された連結文を導き、それらの間には原因の依存関係が成り立つ。これらの接続詞が関連づける2つの分節のうち1番目は複雑で、連結接続詞を目的節や原因節に応じた面よりもより高次のディスコース面に設定し、一方影響を受ける要素はより大きな統語的範囲と複雑さで特徴づけられる。更にこの特性は、連結接続詞をディスコースやテキスト文法に特徴的な単位に位置づける。等位接続詞はこれらのいくつかの特性を共有するものの、挿入句に強制的に付け足されることはなく、また必ずしも《原因-結果》関係になるのでもない。目的・原因節と違い、連結節は述部に必ず外部的になる。連結従属節は主節に前置されることはなく、同等の節に等位されることもない。代わりに、同じ連結辞を共有することで2つの節を等位できる。この構文の「外部的」特徴は焦点化を妨げることにもなる。原因節と従属節に用いた被言表型と言表型の違いは連結節にも拡張できる。一般に、疑問、命令、感嘆等の動詞行為は文法的に別の言表の結果を提示することはないが、言表を表明すること自体で既に提示した内容の推論が可能となる。この種の連結節は結論節と呼ばれることがあるが、連結接続詞はそのような節において主節で主張した結果を確定する。具体的には、疑問を表したり命令したりある状況に対する驚きを表して動詞行為を実行する。

- 46.11. k~o. 伝統的分析では、*consecuentemente, en consecuencia, entonces, por consiguiente, por (lo) tanto* 等を連結接続詞(熟語)と考え、その接辞ディスコース特徴(連結性)を、独特のカテゴリ的性質(副詞的か副詞熟語的)と混同するのが常である。副詞的な連結辞と連結接続詞の間にも同様に違いが存在する。従属接続詞は節の先頭に立つのが普通で、統語的な位置が変わらないが、副詞は連結辞でもいろいろな統語的な位置を受けつける。接続詞は多くの副詞と異なり、複合文を終わらせることはできず、直説法でも接続法でも定形動詞で構成される。接続詞は等位でも従属でも挿入句を

従えることができるが、必須ではなくこの接続詞を別の部分（従属接続詞の場合は人称形動詞の節）から引き離す。この事実により、*por consiguiente, por (lo) tanto* と言った表現を連結接続詞に据えない考えが支持される。同様に、*pues bien* が連結辞であるのは疑う余地がなく、副詞と分析するのが良い。事実、*pues bien* は複合文の最後に現れず、いつもポーズの後で使われる。*aun así*は単独で挿入句を構成できる一方、*aunque*はその可能性が排除されることで、2つの表現が譲歩の意味を失わず、前者が副詞表現で後者が従属接続詞であることを意味するわけではない。連結節の広義の概念（接続詞で構成される節と副詞や代名詞で構成される節も含む）があるが、限定的概念を採るほうが合理的である。同様の概念限定は原因節についても言え、*porque ella me lo dijo*は受入れられるが、*por eso me lo dijo ella*での原因の補語は*por eso mismo*という表現部分のみである。これらの違いは表現の統語的な働きに依拠したもので、表現間にディスコース関係が成り立つのを妨げるものではない。したがって、記述的・方法論的な理由から、接続詞と連結的な性質の副詞の間の違いは保ったほうがよい。だが、その峻別作業は簡単でなく、すべての連結構文で接続詞と副詞のカテゴリーの境界が完全に明確なわけではない。他方、これまでに述べてきた境界カテゴリーは、各々の分析で一致するのではない。例えば、連結接続詞と副詞を区別するカテゴリーとして、連結副詞は接続詞に続く形になるが（*y entonces*）、連結接続詞のほうはそうならない（**y así pues*）。この区別は有益だが時に不安定である。*de ahí que*と*de aquí que*は副詞と分類されるが、これらの表現の他の特徴には合致しない（§46.12以降）。《原因-結果》関係は接辞を通じてマークされるのではなく、等位や並列構造から実現される推論により得られる可能性がある。並列により得られるディスコース結束は語用論的な性質の複雑な過程であり、その解明により統語論が導く違いにわずかながら貢献することができる。「結果」という概念自体で連結接続詞の十全の意味を適切な方法で表しているとは言い難い。したがって、*Solo dices tonterías, conque mejor te callas*で、破線部は連結接続詞により導かれるが、下線部で何かの結果を正確に表しているわけではない。

【第12節 連結構文（Ⅱ）：いくつかの接続詞の特徴】 pp.3519-3526

- 46.12. a~c. 連結小辞の方言差は少ないが、言語レジスターの差は知られている。連結接続詞熟語 *de aquí que*と*de ahí que*は話し言葉より書き言葉で頻繁に使われ、*conque*は書き言葉用法がエッセー的な文章や話し言葉より少ない。逆に、*de modo que*や*de manera que*や*así que*は全てのレジスターで用いられる。*pues*は接続詞・副詞ともメキシコと中米の話し言葉で頻繁に使われ地域差が観察される。連結接続詞（*luego, así, conque*）は数が少ないが、連結接続詞熟語は多い。指示副詞とでは、*de ahí que, de aquí que, así que*が、更に連結的意味の副詞熟語 *así pues*が形成される。《*de*+名詞+*que*》は*de forma / modo / manera / suerte que*等の熟語を生み出す。そのうち*de suerte que*は、古典スペイン語で広く使われていたが現在は書き言葉用法が普通で、中南米より欧

州で熟語的レジスターと繋がるのが普通である。

46.12. d~g. *con* と *que* で接続詞 *conque* が生みだされるが、構成要素に対応した統語的な意味と関係なく、*de modo que* に近い。一方、被統制補語における *con* の意味は、*con* が修飾する述部の機能により得られる独自の意味に依存する。また、*con*+関係代名詞の組み合わせと接続詞も区別される。被統制補語や《*con*+関係詞 *que*》も関係代名詞と組み合わせる場合、*con* と *que* を離して書く必要がある。*con lo que* と *con lo cual* は関係詞・前置詞句であるが、関連する非関係詞句 *con eso* と *con ello* で同じ意味で使われないことから、ある程度連結熟語に近づいていると考えられる。連結接続詞熟語は直説法で構成されるが、例外は *de ahí que* と *de aquí que* で接続法が続く。いくつかの熟語では接続法が目的の意味で使われる。そのため、本来の意味での連結でなくなる。この解釈は結果と相容れるもので、限定詞 *tal* が暗黙に了解されたと見ることができる。更に、この結果解釈では、熟語でなく名詞の数量化構文が得られる。なぜなら、この文脈での *de tal manera que* は、*de una forma tal que* など他の構文と交替できるからである。これは連結と言うよりむしろ目的だが、*forma* と *manera* で形成される連結接続詞熟語は目的でない文脈において対応する、結果の統語的な句と密接な関係を保つ。なぜなら、限定詞 *tal* が省略可能な連結構文において意味変化のみを受けるからである。しかし、*tal* が含まれていなくても許容は可能で、*de forma* と *de tal forma* の交替を許す。

46.12. h~k. 接続詞は無強勢が普通だが、接続詞熟語 (*a fin de que*, *al objeto de que*, *con tal(de) que*) は強勢を置くことができる。そのうち、特に *de modo que* と *de manera que* や、指示副詞を含んだ熟語 *así que*, *así pues*, *de ahí/ aquí que* の4つは、副詞の特徴のアクセント記号まで保持する。ディスコース的な見地から *de ahí que* と *de aquí que* は独特ある。なぜなら、話し手が聞き手に知られたものとして (必ず接続法で)、その推測はしばしば修辭的ではあるが、導入された文情報を提示するからである。これらを生み出す統語構造は部分的に維持され、動詞を置き直して主語の名詞従属節が得られる。この組み合わせは絶対構文と接点を持ち、*de ahí* は主語が動詞句の絶対節において叙述副詞熟語として含まれる。名詞主語の代わりに名詞従属節が現れれば、連結構文を特徴づける《従属接続詞+節》でなく《述部+主語》が得られる。叙述構文と分かるようコンマを置く場合があるが、名詞タイプでも節タイプでも置かないほうがよい。一方、*de* と *ahí* の間にポーズは置かない。*así* は *así que* を作るが、元の直示的・指示的意味を失うことはなく、*de modo que* と *de suerte que* にも *y de ese modo* にも相当する。*así que* は *así es que* という変種も許す。*así* と連結構文の別の接点も存在し、*de ese modo* や *de esa manera* のように、必然的に先行文脈を伝える言い換えを認める一方、結果副詞 *así pues* と *así* は連結接続詞に似た意味も表す。これらには別の接点も加わる。例えば、*Y así están de gordos los camareros y los hombres de negocios* で、*así* は *gordo* を離れた位置から量化し、感嘆文における *bien* と似た形をとる。

46.12. l~s. 多くの連結接続詞が、ディスコース順番 も含めた複合文を起動する。疑問が

先頭に立つと、その中に（時に予想外で）要約を形成するが、単に述べたことの解説も要求する。反対に、*conque* で始まる疑問と感嘆は、相手に不信を示した何らかの事柄を究明する背景に、皮肉や懷疑や非難を表すことが多い。*pues* は特に連結解釈の際は複雑である。説明的原因の接続詞として異なる用法を持ち (§46.6n&q), 2つの用法を許容する。1つは強勢を持ち副詞と見るのが普通で、節の終わりや最初に現れる。もう1つは無強勢の *pues* である。これは説明的な連結接続詞で、多くの例で省略可能である。口語が一般的で、表現に強調を加えた上で、続く情報と既に提示された情報のつなぎ部分を明示的にマークする。欧州の口語と、中南米諸国、特にメキシコと中米とカリブ海地域で特に頻繁で、節の残りのトピックの位置で前置された従属節を離すマークとして働く。この用法が繰り返されると、音声的なすり切れを引き起こして *pos* という変種を生む。文学作品の中の口語として書かれるが、他の言語レベルでは避けたほうがよい。*pues* は非常に多様なディスコース用法を許容し、しばしば口語で返事や反発を始めるための 助け として用いられる。また、その1変種として物語の始めに現れ、既に言ったことと連結がある場合もない場合もあるが、話者が本当のものではなくてもつながりを持たせたいと望んでいることが分かる。もう1つとしては、沈黙を破るか会話を再開する用法がある。対比 と呼ばれる *pues* の用法では、提示したばかりの主張と反対の主張を導く。この用法での反発は非常にしばしば短くて説得力に富む。その1変種として、話者が相手の言ったことを否定し足らず、むしろ驚きや期待していなかったとして注釈を加えるものがある。これは反発部分の *como que* (§46.6s) に対峙するものと考えられる。また、複合文もディスコース順番も最初にない構文における対比用法も多く見られる。*pues* は話者が答えを自明とする場合、ある質問の答えを構成する全てのディスコース部位に前置できる。呼格や反発の始めに置かれた感嘆の支えとして用いられ、反発を強調する性質にアクセントをつける。また別の用法では、特に母音の *e* や語末の *-s* を引き延ばして発音すると、話者の不安定さや優柔不断さを示す。時に、話者の優柔不断さがある程度以上になると、後の文が中断されてしまう。要約的 と呼ばれる用法では形容詞 *bueno* と組み合わせられ、間投詞に近い意味になる。*bueno, pues...* は、続く部分の論証的な支えとして用いるため、話者の意識からある情報を引き出し、情報をその部分で再開する。一般的に、*pues* の意味を峻別する際の困難さは、決定的な部分から来ることで認識される。なぜなら、ある意味に対応した用法の境界は、必ずしも独自の内容を欠いた用法から明確に区別するわけではないからである。一般に、付加的な用法はディスコースのつながりを明示的に確立するのではなく、むしろ言語のいわゆる 交感的機能 (*función fática*), つまり聞き手と話し手の経路を保つものとして特徴づけられる。